

第9回 大学入試のあり方に関する検討会議について

2020年6月16日に大学入試のあり方に関する検討会議が開催された。

14:00から17:30までの予定で、文部科学省東館15階特別会議室で行われた。

今回も前回に引き続きコロナウイルス感染拡大防止で傍聴者は認められず、ライブ配信での中継となった。200人以上の人が視聴していた。

今回の議題は以下の通りである。

1. 外部有識者・団体からのヒアリング
2. 自由討論

今回も前回に引き続きWEB会議方式で行われ、三島座長を含め各委員はネットを經由して参加した。事務局より穴戸委員、渡部委員、吉田委員、途中から参加の予定であることが告げられた。三島座長は途中で退席するため、その後は川嶋委員に座長代理として進行を引き継ぐとのことであった。萩生田大臣は16:00頃から17:30頃まで1時間半ほどの参加であった。

最初に令和3年度の大学入学者選抜の状況について事務局より説明があった。全国の高等学校に対して行ったアンケート調査の結果を踏まえて協議会を開催し、17日には再度協議が予定されている。6月中に実施要項を策定・公表したいと述べた。また、今後の感染拡大に備えてワーキンググループを設置したので、機動的に対応していきたいと述べた。

今回は外部ヒアリングとして、1人15～20分程度（受験産業団体2名と高校教諭の6名については7～10分程度）で11名が意見を述べた。その主な発表内容と質疑応答は以下の通り。

- 高田直芳氏（埼玉県教育委員会教育長）： 地方教育行政の立場から意見を述べた。記述式の導入と4技能試験の実施は、理念と方向性は正しかったものの実現が困難であった。理想や理念とともに実現可能性が大切である。4技能試験は国がやるべきであるし、記述式については個別試験での改善を期待する。学習指導要領に基づいた通常の教育活動の延長線に入試があるべき。
- 質疑応答：
 - （芝井委員）芸術系など学習指導要領がそのままあてはまらない大学もある。センター試験を受験して入学する学生が多数派ではない。
 - 今回は共通テストについて述べたもので、各大学については独自のもので構わない。国で行うテストについてはいろいろな制約があるべき。
 - （末富委員）1点刻みの入試は必要だと思うか。総合選抜や推薦入試など日常の学習評

価の在り方についてどのような取り組みをしているか。

→ 1点刻みの入試については現状として続いていくのであれば、ある程度考えていかなければならない。総合選抜が増えていくことは歓迎すべき。評価の問題は課題として受け止めている。

(末富委員) 教育の評価技術の向上は不可欠である。既卒者の総合選抜も課題である。

(柴田委員) 県立高校は教育委員会の指導が強く、それは全国で統一されていない。今後は統一なのか各地方独自なのか方向性についてどう考えるか。

→ それぞれの地方で変わってくる。今後は教育にお金をかけていきたい。

- 齊藤圭祐氏 (NPO法人全国言友会連絡協議会理事長): 障害者教育の立場から吃音の当事者団体として意見を述べた。吃音はコミュニケーション行動に困難があり、英語のスピーキングに合理的配慮が必要になる。民間企業は合理的配慮の提供が法的義務ではなく努力義務であるし、配慮を求めるために必要となる診断書を書ける医師も少ないという現状がある。障害を持つ生徒が不利にならないような体制づくりをしてほしい。

- 質疑応答:

(芝井委員) 診断書以外でも合理的配慮が認められるよう考えていきたい。

(末富委員) 個別大学ではまだ配慮が十分ではない。よい取り組みがあれば教えてほしい。

→ 情報の準備ができていない。

(柴田委員) 今まで面接などやってきたが、あまり取り上げられてこなかった。参考になるものがあれば聞かせてもらいたい。

→ 今は持ち合わせていない。

- 近藤武夫氏 (東京大学先端科学技術研究センター准教授): 障害者への配慮の観点から意見を述べた。合理的配慮は社会的障壁の除去にあるが、その妥当性の判断に課題がある。それには作問意図と対話して検討する体制整備が必要である。また、必要性については書類による証明が求められるが、その負荷が大きく資料の作成のための公的支援も不在であることが課題となっている。

- 質疑応答:

(両角委員) 資料作成の公的支援はどういう形がよいのか。

→ 現在、所見・資料の作成を支援するプロジェクトを行っている。多くは保護者のみにその負担が課されており、都道府県の教育センターがやっている場合もある。

(小林委員) どのような配慮が今後必要になってくるか。

→ 新しい試験が何を問おうとしているのかテクニカルスタンダードを議論すべき。時間延長の倍率を柔軟にしたり、問題数を変更したりすることが考えられる。

(小林委員) 民間試験についてはどうか。

→ 高い専門性をもった委員会や異議申し立ての仕組みが必要。

(末富委員) 国公立の形態による大学の体制の望ましい在り方はどのようなものか。
→ 学生支援室や学内委員会が意思決定機関の高いところに設置することが求められている。AHEAD JAPAN という組織も支援している。大学の中でも温度差が大きい。大学は既に体制整備が進んできているが、中等教育後期での支援の方が始まったばかりで課題があり重要である。

ここで三島座長が退席し、川嶋委員が進行を引き継いだ。

- 河合英樹氏(学校法人河合塾理事長): 受験産業の立場から意見を述べた。実施要項はもっと強制力を持たせるべき。共通試験はスリム化して、IRTによる複数回実施をし、個別試験は記述式試験を必須化すべき。いずれについても早期告知が必要。英語4技能は社会に出て必要となる能力であるから、国の管理の元で民間試験を受験資格として使用すればよい。記述式は共通テストではなく個別試験で課せばよい。
- 石原賢一氏(駿台教育研究所進学情報事業部部長): 受験産業の立場から意見を述べた。入試の現状として浪人の減少、国公立離れ、難関を避ける傾向にあり、安全志向にあると言われている。入試改革の混乱により仕組みが決まらないことへの不安の表れである。民間試験は私立大で活用されてきた実績があるのだから、同様に利用すればよい。記述式は個別試験で対応すればよい。既卒生への配慮をもっと考慮してもらいたい。

- 質疑応答:

(芝井委員) 9月入試なども言われているが、今年の入試は成立すると思うか。

→ (石原氏) 追試験や日程振替などの対応が必要。タイムスケジュールをできるだけ早く発表してほしい。

(末富委員) ルールを破る大学があるのは、大学の体力の違いではないか。高校の教育が4技能に偏ることによりバランスが崩れると言われているがどうか。

→ (河合氏) 体力が違うからこそ支援の仕組み・実現していく仕組みが必要。4技能を出願要件として使用することによって偏りは軽減できるのではないか。

→ (石原氏) ルールが破られていることを容認しているわけではないが、合わせてやっている。4技能は全員に課すのではなく、得意な人が認められるような形ならば問題ない考える。

(渡部委員) CEFRは入試においてはうまく機能しないだろう。スピーキングの基準もまちまちで統一できない。

→ (河合氏) 出願要件ならば影響は緩和される。CEFRは万能ではないが、別のものが見当たらない。

→ (石原氏) 私大ではアドミッションポリシーに合わせて試験別に基準がある。各大学に任せればよい。共通の枠組みを外して柔軟にするのが自然である。

(柴田委員) 休校中に家庭で学習する方が勉強が進むのではないか。

→ (石原氏) やる学生はやるがボリュームゾーンは指導がないと難しい。

- (河合氏) 学力が高い層はよいが、ボリュームゾーンは管理しないとイケない。
- 杉田道子氏 (秋田県立秋田北高等学校教育専門監): 英語教諭であり、進路指導に携わる高校教員として意見を述べた。英語民間試験は共通テストに用いない方がよい。もし導入されていたら授業で民間試験対策をしなければいけなかった。進路指導においては面接の指導や調査書作成の煩雑さなどがあり負担に感じている。大学入試は影響力がありその波及効果に期待している。
 - 井坂直樹氏 (茨城県立土浦第一高等学校教諭): 数学教諭であり、進路指導に携わる高校教員として意見を述べた。昨年度の生徒は超安全志向であったし、今年度の生徒は学習に不安を感じており、入試改革に漠然と反対している。大学入試の影響力は大きいので慎重に検討してほしい。記述式は個別試験で活用することが望ましい。
 - 小玉裕介氏 (石川県立金沢泉丘高等学校教諭): 国語教諭であり、進路指導に携わる高校教員として意見を述べた。入試の影響力は大きいので、幅広い分野を問うてほしい。記述式は模範解答が作れないような問題が推奨されるべきで、二次試験で問うのがよい。共通テストは二段階選抜のみに用いてはどうか。AO や推薦入試における教員の負担増も見逃せない。
 - 質疑応答:
 - (柴田委員) 最終的に英語は民間試験に移行すべきと思うか。
 - (杉田氏) 民間試験には頼らない方がよい。共通テストの中でできればよい。
 - (柴田委員) 文系に進む人では数学は暗記だという人もいる。
 - (井坂氏) 文系の人も数学を身につけてほしい。文系の人にも個別入試で数学を課す方向もある。出題の仕方によって暗記と思われることを防ぐこともできるのではないか。
 - (岡委員) 大学一年生の英語教育では英語嫌いじゃべれない人もいる。基礎的な力を身につけるにはどうすればよいか。
 - (杉田氏) 外国の人とのコミュニケーションの経験がないことが問題。そのような経験をさせてあげられるとよい。
 - (清水委員) 4 技能・国語の記述・数学の記述について生徒の肌感覚で気づいたことがあれば教えてもらいたい。
 - (井坂氏) 確かに温度差はあった。記述は学校の指導への期待感があった。4 技能試験は受けることさえできなくなるのではないかという不安感があった。
 - 藪内章彦氏 (兵庫県立姫路西高等学校主幹教諭): 英語教諭であり、現場の高校教員として意見を述べた。英語で討論できる生徒の育成を目標に指導してきた。日本人の英語力に対して危惧している。コミュニケーションより入試対策に偏り、対話の経験も不足している。共通テストは現行通りにしてほしい。4 技能試験を実施する場合は共通テストの中で行い、時間をかけて実現してほしい。導入案として1人1台のタブレット使用、AI 採点、複数回受験を提案する。

- 谷口みち佳氏（愛媛県立松山南高等学校教諭）：国語教諭であり、進路指導に携わる高校教員として意見を述べた。高校教育で高めてきたことがおろそかにされない入試にしてほしい。共通テストは公平であるべきで、2年前から周知をしてほしい。1点刻みの入試も必要である。ボーダー付近のみ得点以外の情報も含めた総合判断にする方法もある。記述式は個別試験で実施すればよい。実施できない大学にはセンターが問題を提供すればよいのではないか。調査書も枚数制限がなくなり負担が増えている。ポートフォリオもハードルが高い。4技能評価は共通テスト内で実施するのがよいが、できないのであれば個別試験で実施すればよい。
- 高木慎二氏（熊本県立八代高等学校指導教諭）：英語教諭であり、進路指導に携わる高校教員として意見を述べた。入試改革を見据えて4技能を指導してきたが、実際の生徒のデータを見るとCEFRの基準ではバンド幅が広すぎて生徒を選別することはできない。4技能を共通テストで測りたいのであれば、センター試験が作成するしかない。
- 質疑応答：
 - （牧田委員）ポートフォリオが難しい理由は何か。
 - （谷口氏）生徒が自由に書くことができるが、入試に使うには高校が担保しなければならない。公平さなどを考えると難しい。
 - （芝井委員）議論の機会が少ないのは英語だけの問題ではない。英語だけでディベートになるか。
 - （藪内氏）授業内のディベートやディベートコンテストなども開催しているが、すごいレベルでやっている。ディベートに備えてグループ内で役割分担して十分な準備をしている。日本語でのディベートをやることもあり、高校生はそのようなことに飢えている。
 - （岡委員）4技能について高校の先生が評価するのはどうか。
 - （高木氏）面白そうだと思う。しっかりとしたルーブリックや評価軸が必要。しかし、判官鼻頂になりそう。
 - （藪内氏）可能ではあるが公平性を欠く。共通テストの中でできればよい。
 - （斎木委員）英語の複数回受験を提案していたが共通テストの中でやるのか。他の教科は複数回ではないのに英語だけが複数になるのか。
 - （藪内氏）共通テストなのかアセスメントとしてかもしれないが、何度も使えるようになるという。

萩生田大臣は退席の際に、杉田氏へ質問をした。「民間試験が共通テストに採用されていたら対策授業を行っていた」という杉田氏の発言について、7つ全部の試験の対策ができるわけではないと思うが、実際はどうかという質問であった。これに対し、杉田氏は「学校で推奨する試験として英検を選択し、それに対して指導を行う」との回答であった。

最後に益戸委員が、会議の進め方として今後もこのオンライン方式を継続してほしいとの要望を述べた。

次回の第10回会議は6月26日(金)に開催される予定である。時間についてはヒアリング対象者と調整中であり、決まり次第連絡することとなった。